

## ジェノサイド研究とは何か

プロジェクト・リーダー 木村 章 男

当プロジェクトは予算不足により当初の計画から大幅に縮小し、今のところ主に4人のメンバーによる個人研究を行っている。もともとジェノサイド研究はいわゆる学際的な研究領域であり、現在活動中の世界のジェノサイド研究者の顔ぶれを見ても、歴史、政治学、国際法、倫理学、社会学、人類学、心理学、ジェンダー研究、文学理論、メディア論、映画論など、その本来の研究分野は多岐にわたる。それぞれの分野での方法論を生かしながら、その事例もまた多岐にわたるジェノサイドについて、様々な角度からの研究が進められている。この報告では、日本での認知度が欧米に比べて極端に低いと思われるジェノサイド研究について、簡単な紹介をしておきたい。

ジェノサイド genocide という言葉は、ポーランドの法律学者ラファエル・レムキン Raphael Lemkinが、ナチスによるユダヤ人の大量虐殺を告発するために、彼の著書 *Axis Rule in Occupied Europe* (1944) の中で用いた造語で、集団又はその一部を民族や人種などの集団的アイデンティティを根拠に意図的に破壊することを意味する。レムキン自身ナチスによる迫害を逃れてアメリカに移住したユダヤ人であり、ジェノサイドの最初の定義はナチスによるユダヤ人虐殺（いわゆるホロコースト）という特定の事件をモデルになされた。しかし今日この語はむしろ濫用が批判されるほど一般化し、他の類似した現象を記述するために応用されるなど、すでに日常の英語の語彙の一部になっている。たとえば、他の集団の言語や宗教などの伝承を禁じ、強引な同化を促すことを意味する文化的ジェノサイド cultural genocide、国家が政策によってその国民の全体又は一部を虐殺することを意味するデモサイド democide（別名ポリティサイド politicide、例として中国の文化大革命、第二次大戦中の日本における一億総玉砕など）、環境破壊による動植物の絶滅、あるいは生存の条件である環境全体を破壊することを意味するエコサイド ecocide、などはジェ

ノサイドから派生した語である。またあまり好ましくない応用の例として、ジェノサイドの名を冠したコンピューターゲームがあり、レムキンがこの語に託していた思いとは裏腹に、かえって集団的暴力に対する危機感を弱めるという負の効果も生んでしまっているようである。

ジェノサイド研究が本格化したのは1990年代になってからで、冷戦構造崩壊後に頻発した地域紛争の中で、少数民族に対する迫害が各地で起きたことが背景にある。1994年にはルワンダでツチ族によるフツ族の虐殺があり、また1993年から1999年にかけては旧ユーゴスラヴィアにおいて対立する民族間での虐殺事件、特にセルビア人による「民族浄化」があった。これらの事件については、それぞれの事件を裁くために特別に設けられた国際刑事裁判所が、「集団殺害罪の防止及び処罰に関する条約」（1948年に国連総会で採択、通称ジェノサイド条約）に基づき、ジェノサイド罪を適用し裁いた。これら二つのジェノサイドは比較的明らかなジェノサイドの事例として、ジェノサイドに関する学会においてもホロコーストとともに研究課題の中心となっている。論文の発表、研究書や回想録の出版も盛んであり、ルワンダのジェノサイドについてはそれを題材にした映画『ホテル・ルワンダ』が上映され、話題となった。かつてホロコーストについては（実は今でもそうだが）それに関して多種多数の本が出版され、世界中で無数の講演がなされ、資料館や記念館が建てられ、多くの大学がホロコースト研究所を設置し、映画や歌が作られ、その度に広告が様々なメディアを通して流れ、そのあまりの経済効果ゆえ、その全体を称してホロコースト産業とまで言われた。ルワンダや旧ユーゴについてもすでにそうした気配が見え始めている。こうしたジェノサイドの産業化もまたジェノサイド研究の対象である。

ジェノサイドという語、あるいはその概念、の起源はホロコーストにあり、ルワンダや旧ユーゴにおけるジェノサイドをジェノサイドとして研究するということは、すでにその方法に比較を含んでいる。比較ジェノサイド研究はジェノサイド研究の根幹を成すものである。それはまたジェノサイドの定義の問題とも関わる。ジェノサイド条約におけるジェノサイドの定義については批判が多く、たとえば「国民的、人種的、民族的又は宗教的集団を全部又は一部破壊する意図をもって行われた」（“committed with intent to destroy, in whole or in part, a national, ethnical, racial or religious group”）行為をジェノサイドと定義しているが、「国民」、「人種」、「民族」、「宗教」はそれぞれ曖昧な概念であり、また「全部」を破壊することは現実的に「意図」できるものなのか、また「一部」とは何人のことを言うのか、など議論

が絶えない。さらに、ジェノサイドの定義をめぐる議論は過去のどの事例をジェノサイドとみなすのかという議論とシンクロナイズしている。現在研究者の間でジェノサイドとして一応多数の理解が得られている事例としては、トルコにおけるアルメニア人に対する虐殺、ホロコースト、カンボジアにおけるクメール・ルージュによる虐殺、東ティモールにおけるインドネシア軍による虐殺、ルワンダにおける虐殺、旧ユーゴの「民族浄化」、現在進行中のスーダンのダルフル地方における虐殺、が挙げられる。反対にジェノサイドと呼ぶべきかどうか研究者の間で意見の一致がまだ見られない事例として、古代、中世における大虐殺、大航海時代から植民時代にかけての原住民の虐殺とその後の同化政策、スターリンによる大粛清、南京事件、広島・長崎への原爆投下、文化大革命、などがある。

このようにジェノサイド研究は新しい研究領域でありながら、過去と現在、世界全地域を対象とし、様々な知識が動員された複雑な研究領域となっている。